

対立の連結辞の共起関係について — bien au contraire の場合 —

田代 雅幸
(アテネ・フランセ講師)

本発表は、フランス語の対立の連結辞の共起関係を明らかにすることを目的とした計量的研究の一環として、au contraire の拡張形である bien au contraire の用法的特徴を扱うものである。フランス語の対立の連結辞の中で、用法的に独特の振る舞いをする au contraire は、例(1)(2)のように bien au contraire や tout au contraire といった拡張形を持つという点でもまた、他の連結辞と異なっている：

(1) « L'exploitation illégale a lieu en majorité dans les régions en conflit, pointe le rapport. Elle ne diminue pas, *bien au contraire*, car les cartels sont mieux organisés et déplacent leurs activités pour échapper aux services de police ». (*Le Monde*, 28/9/2012)

(2) On pourra toujours multiplier et surentraîner à la guérilla urbaine les « robocops », cela n'évitera pas les révoltes... *tout au contraire*, cela attisera les braises. (*Le Monde*, 20/8/2012)

bien や tout といったいわゆる強度の副詞を伴ったこれら形態は、一般的に「au contraire が副詞によって強調された形態」と見なされがちであり、これといった先行研究も見当たらない。しかし、Le Monde の一年分の記事をコーパスに、例文の生起位置の分布や用法の分布を観察した結果、au contraire とその拡張形、とりわけ bien au contraire の用いられ方が異なっていることが明らかになった。具体的には、bien au contraire は反駁的な構造を持つ用法にほぼ限定して出現し、それも後件が非明示である割合が非常に高い。本発表では、この計量的調査について詳しく述べるとともに、この結果から bien au contraire を構成する bien が、一種の間主観性のマーカーとして機能している可能性を論じる。